

ミャンマー現場公務員（森林官）の 家計実態について

佐 藤 隆 幸

1 はじめに

筆者は2001年12月から2004年7月までの間、JICA 専門家としてミャンマーに派遣され、ミャンマー中央乾燥地の村々を巡り、共有林の普及活動の指導に携わっていた。1年間で地球1周半以上という距離を走り回り、その間、ミャンマーのカウンターパートや普及員（普及活動を最前線で行う地方出先の森林局職員で、森林官クラス（以下、「森林官」と言う。)), 村民などと日々付き合ってきた。筆者の経験を通じたミャンマー森林官の生活実態の一端を紹介してみたい。

筆者は普及活動の指導を進めていくに従って、森林官の活動の鈍さと彼らが説明する活動阻害要因に違和感をもった。彼らは、他の業務が忙しい、現場が遠い、参加型手法に慣れていない等々と説明していたが、その意味するところの本音が伝わってこなかったのである。例えば、「他の業務が忙しい」という言い方は、我々外国人専門家に対する言い方ではないのか。もっと根本的な理由があって活動しない、又は出来ないのではないかと感じていた。

そこで、彼らの活動を阻害している本当の要因は何かを、掘り下げて聞き出す必要があった。このため、それまでとは別の観点から、普及活動を実際に行うミャンマー林業省森林局の森林官がおかれている職務上の立場、生活環境、課題等を調べてみることにした。

具体的には、森林官とその上司や部下が、どのような家計実態であるかを調べるため、具体的なデータの一つとして、彼らの月額平均支出、家族数を取り上げて聞き取りを行った。

Takayuki Sato : Actual Living Conditions of Myanmar Public Servant
林野庁上川南部森林管理署長、前 JICA 「ミャンマー乾燥地共有林研修・普及計画」
専門家

その結果、当初、想定していなかった活動阻害要因が見出されたので、その調査過程を通じてわかったミャンマー公務員（森林官等）の普段の姿はどのようなものであるかを、少しでも多くの方々に知っていただければと、その当時のデータなどを含め紹介する。

なお、ここで示したデータは、2004 年前半期までのものである。

2 森林官等の収入月額

ミャンマーの公務員（森林局の職員を含む。）の給与については、その職位によって定められている。その給与額は、以下の通りである（2004 年 7 月現在、カウンターパートからの聞き取りによる。）。

なお、単純な比較はできないが、職位を日本の国有林組織に当てはめてみるとわかりやすいので、参考として付け加えてみる。

- ・スタッフオフィサー（森林管理署長、以下「署長」という。）：森林官の上司で給与は 7,500Ks¹。
- ・レンジオフィサー（支署長、以下「支署長」という。）：森林官の上司で給与は 5,400 Ks。
- ・フォレストレンジャー（森林官、以下「森林官」という。）：普及員で給与は 4,800 Ks。
- ・フォレスター（森林事務所員、以下「所員 F」という。）：森林官の部下で給与は 4,200 K
- ・フォレストガード（森林事務所員、以下「所員 G」という。）：森林官の部下で給与は 3,600Ks²。

ミャンマーの公務員は、給与のほかに米代や油代等の支給名目で全職位共通で一律に 5,000 Ks が支給されていた。例えば、森林官は月給 4,800 Ks に 5,000 Ks を加算して 9,800 Ks を月々、政府から支払われていた。公務員としての給与等はこれが全てで、ミャンマーでボーナス、特別手当等が出たということを筆者は聞いたことがない。

¹Ks はチャット Kyat (Ks) のことで、ミャンマーの現地通貨単位である。

²職位ごとの公務員給与は、2006 年 4 月以降 5 倍から 12 倍に増額され、署長、支署長、森林官、所員 F 及び所員 G の給与についてはそれぞれ、80,000 Ks（以前と比べ 11 倍）、39,000 Ks（7 倍）、33,000 Ks（7 倍）、27,000 Ks（6 倍）、21,000 Ks（6 倍）となった。

3 森林官等の支出月額

ミャンマーの政治情勢、各種統計データの整備状況等を勘案すると、個々の世帯の家計を詳細に調べることは非常に困難なことであったため、筆者自身が現場で簡易に把握できる大雑把な代替指標が必要であった。

このため、各森林管理署（支署）において、森林官等から直接、職位、家族数、支出月額を聞き取り調査した。

聞き取り対象のミャンマー人は、熱心な仏教徒であったため、嘘をつかないことが徹底しており、聞き取り調査結果は比較的に正確な数値と推測された。これは、筆者がカウンターパートと地方出張で寝泊りし、隈なく歩き回った生活実感からも裏付けられるものであると考えている。

（ア） サンプル数

聞き取り調査の総サンプル数は 38 世帯で、職位別には署長 3 世帯、支署長 8 世帯、森林官 22 世帯及び所員 F5 世帯であった。

（イ） 聞き取り結果

「全職位総計」と「森林官のみ」のそれぞれの家族数ごとの支出月額を平均したものが、以下のデータである。

結果は表 1 のとおり、全職位の 1 世帯の平均支出月額が 32,079 Ks、森林官の世帯が 38,773 Ks であった。

（ウ） 業務遂行に当たっての他の支出

普及活動が促進されない原因の一つとして、現地までの移動が困難であるとの回答が非常に多かった。この回答の意味するところは、業務遂行に当たって



写真 1 森林管理署の職員

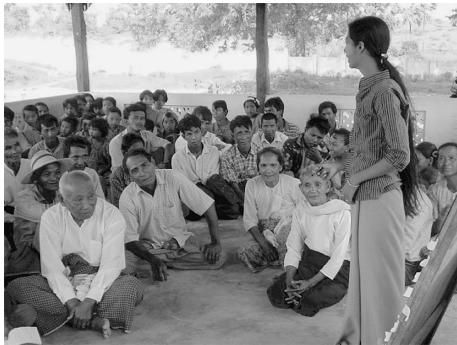


写真 2 村のパゴダ（仏塔）での普及活動

表 1 森林官等の現場公務員の支出月額 単位：Ks

全職位			森林官のみ		
家族数	サンプル数	支出月額	家族数	サンプル数	支出月額
1人	6	25,833	1人	2	20,000
2人	4	12,750	2人	3	15,000
3人	4	28,750	3人	4	28,333
4人	13	34,462	4人	8	27,250
5人	6	35,833	5人	4	40,000
6人	3	45,000	6人	2	42,500
7人	1	40,000			
8人	1	60,000			
平均	38	32,079	平均	22	38,773



写真 3 地方での移動に利用する「乗合バス」

乗合バスや私物バイクを使って移動する必要があるためである。その交通費、ガソリン代が馬鹿にならないのである。

具体的には、乗合バスを利用する場合、多くの森林官の回答から1回当たり往復でおおよそ 500 Ks ～1,000 Ks 程度かかり、月 4 回程度現場に行くと 2,000 Ks ～4,000 Ks もかかることになる。また、バイクを使った外業の場合、ガソリン代は自費で1回当たり 2,000 Ks

程度かかっているようで、一回の出張で 10,000 Ks もかかる事例も見られた。

さらに、森林官やその部下たちの仕事の場合は、多くの場合、山の中である。村からさらに徒歩で半日から2日かけて現場に行く者も珍しくない。その際は、米を背負って現場近くの部落で寝泊りし（村長宅や親友の家）、自炊するか米を預ける。さらに足りなければ、1泊いくらでお金（1食 350 Ks 程度）を支払うようである。これらも全て森林官等の自費で、国から旅費・日当等は支払われない。

なお、森林局には、旅費・日当に関する規定があるが、その額はごく少額でかつ支払われたと聞いたことはない。

以上は、(イ)で書いた支出に含まれると推測しているが、外業・出張に出る機会が増えれば増えるほど、森林官等の私費の支出がかさむことがわかる。

4 地方における現地通貨チャット (Ks) の実勢価値観

ただ単に支出・収入の月額を示しても、比較対象がなければ、その額がどの程度の価値があるのかわかりにくい。そこで、ある程度、現地通貨の価値の感覚を想像して頂くために、筆者が地方出張した際の物価の実勢を記憶から追ってみたい。

食費については、森林官を含むミャンマーの田舎(町村)に住む人々は、朝食を喫茶食堂等で外食する機会が意外に多いようである。有名なモヒンガーや麺類、焼き飯等の朝食のほかに、ミャンマー茶、コーヒーなどを注文する。前者が 200 Ks 程度、後者が 100 Ks 程度で、朝食に 300 Ks 程度を使うようである。昼食、夕食はさすがに自宅でとるのが一般的であるが、出張の際にカウンターパートとともに昼食、夕食などを町の食堂で摂る機会が多く、その食堂での値段は主食のカレー、ご飯、野菜炒め、生野菜などで、平均 700 Ks～800 Ks 程度かかっていた。

飲み水は、1 リットルのペットボトル飲料水で 100 Ks～150 Ks 程度であった。

以上のように飲食に関する限り、1 Ks (Kyat)=1 円として計算すると、地方の物価の実勢が理解できる。もちろん、米、野菜などの生活必需品の食材はかなり安いようである。

衣類については、ミャンマーのほとんどの男性諸君が愛用するロンジー(巻きスカート)は素材によって様々であるが、筆者は現場職員と同じ程度の綿製の‘つるし’を愛用していたが、2,000 Ks～4,000 Ks 程度で購入できた。ワイシャツ代わりの白シャツは 4,000 Ks～5,000 Ks 程度で意外に高かった記憶がある。現地の方々は下着をはいていないので、普段の生活では、ロンジーと(T)シャツが数枚あれば事足りるようである。

以上から、地方の国家公務員の場合、普段の生活を行う上では、



写真 4 地方食堂での朝食風景

支出の大きな部分が食費であろうから、1 Ks (Kyat)≒1 円で想像して頂ければよい。

5 収入と支出から何がわかるか

これまでみてきたように、当然のことであるが家族数と平均支出月額との関係は、比例関係にあった。なお、サンプル数の少ない7～8人家族を除いた全職種の平均支出月額は、31,000 Ks であった。森林官を見ると平均支出月額は39,000 Ks であった。

一方、森林官が森林局から受け取る収入月額は、9,800 Ks であった。すなわち、支出月額が収入月額の4倍であり、毎月約30千Ksの赤字となる。この赤字分30,000 Ksを、公務員としての正規の給与以外で稼がないと、彼らは生活を維持することができないこととなる。

では、どのようにしてその赤字分を補っているのでしょうか。正式に聞き取りを行ったわけではないが、普段の会話の中で聞いた範囲の情報とそこからの推測を含めて記すと、

- ① 食糧等の生活必需品を自給自足し儉約生活をする
- ② 家族（共稼ぎ）や親・兄弟などの親類縁者の稼ぎから支援を得る
- ③ 自らが、公務以外の副業で収入を確保する

などであり、①から③までの複数を行っている場合も多いのではないかと推測している。副業の具体的な事例は、数多く聞いているが支障があるのでここでは省略する。

6 家計実態が公務（普及活動）に及ぼす影響

普及活動に影響を及ぼすのが、上記の③の場合である。公務以外で収入を得るということは、公務をせずに副業に精を出す（別な言い方をすれば、副業の合間に公務を行う。）ことを意味している。副業で収入を得られなければ、家族を路頭に迷わせることになることから、家族愛の非常に強いミャンマー人としては、必死にならざるを得ない状況が容易に推測できる。

従って、公務以外に副業で収入を稼いでいる場合、当然のことながら公務の普及活動にも影響を及ぼすことになる。特に、森林官クラスの者にとっては、業務を行う上で普及活動の優先度は（本音としては）低く、なおさら普及活動は置き去りになることが想像される。すなわち、ミャンマーの公務員の給与体系、収入・支出形態が変わらない限り、多くの森林官は普及活動に集中できず、

最悪の場合、普及活動を行えない（又は行わない）という状況となる。別な言い方をすると、普及活動がなかなか進まない、あるいは活発に行われない場合、その非常に大きな要因の一つとして、森林官の収入・支出構造が関与していると言えそうである。

7 おわりに

我々は、「他の業務が忙しい」とか「現地までの移動が難しい」という森林官等の言葉の根底にこのような厳しい事情があることを十分理解し、彼らの行動形態を参酌して、ミャンマーの政府職員に対する支援、助言、協力を行わない限り、彼らの普及活動の阻害のみならず、反感を買うことにも繋がりがかねないことを肝に銘じておくべきであろう。

以上、ミャンマーの森林局現場職員（森林官等）がおかれている生活環境の一端でも、ご理解いただけることを願っている次第である。

（海外林業事情）

- 中国は年間に 45 億対の箸（130 万 m³ の木材量）を生産している。森林資源保護のために、中国政府は使い捨て木製箸に 5% の税金を導入した。また、中国政府は環境保護と貧富の格差是正のために、ヨット、高級時計、ゴルフクラブ、多燃料消費自動車、木製床パネルなどの物品の消費税を 5～20% 上げた。
- 中国は 2005 年の木製品の輸出量が輸入量を上回った。この年の国産木製品の総輸出額は US \$ 38.32 億であった。これは木材工業の総生産額の 43% に相当する。林産物輸出は地方政府の主要歳入源となり、農民に収入増と新しい仕事をもたらしている。木製家具は輸出品の首位を占め、さらに急速に成長を続けている。

（以上 FAO-RAP Forest News より）